



朴 天 秀

はじめに

①大加耶圏成立前後における加耶勢力の動向と対倭交渉

②6世紀前葉における大加耶と百済の対倭交渉

おわりに

【本文要旨】

大加耶は高靈を拠点にして成長し、5世紀後半には黃江水系の陝川、居昌、南江水系の成陽、南原（阿英、雲峯）、蟾津江水系の南原盆地、求礼、河東、錦江水系の長水、鎮安地域にかけた広い圏域を形成する加耶史上の画期的な発展をとげた加耶後期の中心国である。

5世紀中葉、日本列島における渡来系文物の出自が金官加耶系から大加耶系に転換することや、加耶における倭系文物の移入地域が金官加耶圏から大加耶圏に移ることは倭との交易と交渉を掌握した中心勢力が金海から高靈へ移動するという政治的変化を反映することである。この時期大加耶は交通の十字路である南江上流域を掌握して百済との交渉を主導し、また同時に南原盆地に南下して求礼地域をへて蟾津江下口の交易港である河東を確保することによって、金官加耶、阿羅加耶、小加耶が行なっていた倭との交易をふくめた交渉を主導できるようになった。大加耶は対百済や対倭との交渉を主導することによって、金官加耶、阿羅加耶、小加耶を制圧し、加耶地域の中心的な存在と君臨できるようになった。

加耶地域における宜寧の景山里1号墳と雲谷里1号墳、松鶴洞1号墳B号石室、泗川船津里古墳のような古墳の被葬者は、栄山江流域における前方後円墳とともに石室の構造、景山里1号墳石屋形石棺の分布とその出現過程から、北部九州から有明海沿岸に出自をもつ倭人と判断される。倭系古墳の被葬者は大加耶の対倭、対百済、対新羅交渉のみでなく、地方統治の政策と関わっていた可能性が想定される。

6世紀前葉、百済が大加耶圏域とその南方の栄山江流域に本格的に進出すると、渡来系文物の舶載地が大加耶から百済に転換する。また、倭系文物が交替するよう洛東江流域から百済と関係が深い栄山江流域に集中する。この6世紀前半こそ、先史時代以来の伝統的な加耶地域と倭の日常的交流を乗り越えて、はじめて百済が、対倭交渉の主導権を握る時期である。